
碧陽学園の異端者 《イレギュラー》

ガイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧陽学園の異端者
イレギュラー

【Zコード】

Z8472Z

【作者名】

ガイド

【あらすじ】

碧陽学園に一人の青年がやつて來た！？

しかし青年 宝樹新羅はちょいと《イレギュラー》

「ちょい、

マジで近づくな！？」

実は彼は女性恐怖症！？

そんな彼が、成り行きで入ってしまった生徒会でどう生まるのか（笑）

第1話 存在しないプロローグ（前書き）

生徒会の一存まだ一巻しか読んでないのに、書いちやいました。なので更新遅めですが頑張ります。

第1話 存在しないプロローグ

- ルール1 神の存在を受け入れる
- ルール2 彼らに直接触れてはいけない
- ルール3 友達の友達は我ら。それが干渉限界
- ルール4 企業の意向は何よりも優先される
- ルール5 スタッフは、個人の思想を持ち込むなけれ
- ルール6 情報の漏洩は最大にして最悪の禁忌である
- ルール7 我らが騙すのは人ではなく神であることを忘れてはいけない
- ルール8 このプロジェクトに道徳心は必要ない。全ては企業の利益のために
- ルール9 性質上、学園の保持は最大の命題である
- 追加ルール 今年の生徒会には気をつける

第2話 「女性と関わるのはマジで御免だからなー?」（前書き）

短いです……

第2話 「女性と関わるのはマジで御免だからなー?」

「お兄様。起きてください、お兄様」

俺の耳から、少女の声が聴こえた。

俺が目を覚ますと、水色の髪のミディアムヘアをした少女が映つてきた。

俺の名前は宝樹新羅たからき しんら。一応高校三年生、17歳。宝樹家の長男。そんな俺をお兄様呼ばわりして起こしてきたのが、宝樹春美。俺の呼び方から分かる通り長女の義妹で小学五年、10歳だ。

こいつは俺のことをお兄様なんて呼んだりするが、俺達家族はどつかのお貴族様というわけではなく、普通の一軒家に住んでい。ん。様呼ばわりするのは、春美のキャラクターの一つとして受け取ってくれて構わない。

「ああ、今起きるわ……」

「お兄様、今日はお兄様が碧陽学園に転校する日ですよ」

ちなみに、こいつは誰に対しても丁寧口調。

最初は丁寧口調は家族には止めてくれなんて言つたが、治る」とは

なく、今では『丁寧口調でこそ春美』という、当たり前の形に収まっている。丁寧口調じゃなければ千春らしくないとも言える。……それにしてもそっか……今日、碧陽学園に転校する予定だけ。……やだなあ、確か碧陽学園つて男女共同だよな。

俺が嫌がつてゐるのに、何故碧陽学園に転校しなければ、ならぬかは理由がある。

最近、少子化問題が話題になつてゐるのは、学生の皆もんなり存じだろつ。

簡単に言えば、俺の通つてた男子校が不幸にも少子化問題の波に直撃。結果、廃校となつてしまつたのだ。

正直これは、俺にとつて大問題。新しい高校先を見つければ良いと言つわけではなかつた。

問題はその高校。近辺の男子校は俺の通つてた学校だけで、どこにもなく、最終的に男女共学の碧陽学園に転校することになつてしまつた。

……「れのどこに問題があるかつて?……大事だよ。おおじて

なんせ俺は『女性恐怖症』なんだからな。よく他人事にされるが、俺にしては大問題。自分の危険信号が赤で、高速で点滅してゐる状態だからな。

ああ、女性恐怖症とは言つたが、家族の女どもまで怖がつたりはない。

兄が妹たちまで怖がつてどうするかってんだ。

……だから俺にとつて、男女共学の学校はきつかった。
おまけにこの学校に行く道は前の学校と違つて、大通りを通りなければいけない上に、電車にも乗らなければ行けない。公園の公衆トイレみたいに、男子女子分けられている分けではないから、男女混み合つてしまつのが、当たり前だ。

「お兄様、」飯にしますか、お風呂にしますか、それとも私と…／＼

「結構だ」

と、俺には想像出来ぬ何かしらを言われる前に、その口を止めておく。
……て、顔赤くなつてるし…?やはり、よからぬことを考えていたんだな。

……まあ、それは置いておくとして、早く学校に行かないとな。学校がイヤだからといつても、初日から遅刻で怒られるなんて、御免だし。

「お兄様のお弁当は机の上に置いて置きますね」

ちなみに、春美は家事全般が得意で、よく家族の部屋を掃除してくれたり、弁当を作ってくれたりしている。

俺も時々いつひつて、弁当を作つて貰つてゐるから、助けになつてゐる。

「ああ、ありがとうな

「……学園内では氣をつけて下さーい。あそこは、女性の方も居ますし、避けるのは難しいですじ

「避けるのは、高確率で無理だろひと想つねどな

「大丈夫です、……お兄様に関わつてくる女性がいましたら、お兄様が避ける前に、その女性を……」

「……？」

「裂きますから」

あれ？意味が違うよつこ、感じたのは氣のせいか。

恐らく氣のせいだらう。そう想つたい。

とにかく、学校に行かないとな。電車が混み合つのは、御免だし。

俺はその後朝食を食べ終えると、嫌々ながらも碧陽学園に向かつてとこした。

変なこと起きないよな？

女の子と関わったり、女性と関わったり、女人と関わったりするのはマジで御免だからな。

そう思いながら、俺は家を後にした。

第2話 「女性と関わるのはマジで御免だからなー?」（後書き）

次回予告

春美「ああ、お兄様行つてしましました。私と愛を育む時間が……ともかく、次回は『生徒会！学校に居るだけでも苦しいのに、御免だよ』、です。……しかし)の内容からだとやはりイヤな予感が……。

以上、宝樹春美が僭越ながらもお送りしました。次回もお楽しみに。

第3話 「生徒会ー学校に通るだけでも苦しきのと、御免だよ」（前書き）

はい、3話投稿です。もちろん短いです。

第3話 「生徒会ー学校に居るだけでも苦しいの、御免だよ」

「で、どうして生徒会に入つてくれないの？」

「生徒会は美少女だらけよ？」

桜野くりむと紅葉知弦といふ名の美少女2人が、HRが終わった後、そう言つてきた。

え？女性恐怖症じゃないのかつて？

ああ、そうだよ。俺は今猛烈に緊張している。

俺は女性と話すことだけならできるが、それでもやはり緊張する。近づかれ過ぎたり、触られたりするのは以ての外だ。

しかも生徒会ー？学校に居るだけでも苦しいのに、そんな仕事御免だよ。

……なぜこんな状況になつてしまつたかと言つと、俺が遅刻したから。

遅刻した理由は簡単。俺が電車に乗らなかつたから。最初は乗るつもりだつたんだが、電車の中の女性が混じつてゐる人混みみたら、体が震えて仕方ないつての。

だつて女性があとにも乗つて来るんだぜ。話すだけでも緊張するのに、そんな女性がわんさか乗つて来たら堪らない状況になる。

女性にサンドイッチにされる……男にとつたらこれ以上の幸せはないかもしだれないが、俺にとつたら地獄そのもの。考えるだけでも恐ろしい。

しかしそんなことも知らないこの2人は、『初日に遅刻したから生徒会で鍛え直す』とか言って、遅刻したのを良いことに今もなお、『生徒会に入れ』と半端強制的にせがんでくるばかりだ。

……女性と避けるのは不可能なんて、入る前から覚悟してたことだけど、まさか遅刻しただけで、このような状況になってしまふなんて思つても見なかつた。

しかも聞けば、こここの生徒会は殆どが女性らしい。それが男ならともかく、女性の集まりだからこそ食らえだ。

「断るつてか何で俺が生徒会に入らなければ行けないんだ！」

「それは初日から遅刻したからよ。そんな気の揺るんだ奴初めて見たわ」

うつ……こんな口汚いのがどうのなんて、言われると思つてなかつた。

確かに悪いことはしたけど、それで俺に女性の集まりの生徒会に入れと言われても、俺にしたら一種の拷問だぞ。

「なぜ生徒会に入りたくないの？」

「嫌だからです」

「理由は？」

「嫌だからです」

「なぜ嫌なの？」

「嫌だからです」

「ふざけないで」

「『1』みんなさい」

ヤバい。本当にこのままだと、黄泉の門を開くことになる。

……俺が女性恐怖症だといった方が良いのか？でもそしたら、俺の

クラスからの評価が下がってしまうし、それもそれできついしな。

「俺が生徒会に入るのは一種の拷問です」

「なにそれ？生徒会そんなに怖くないよ

「さうよ、新羅君。それこそ何で新羅君は、生徒会が一種の拷問と思つの？」

「それなりの理由があるんです」

「その理由は何かしら?」

「嫌だからです」

「なぜ嫌のかしら?」

「嫌だからです」

「私の拷問の方が怖いわよ

「それも嫌です」

「だつたら生徒会に入りなさい」

「断ります」

「だつたら私の拷問を「喜んで入らせて頂きます」宜しい」

はー? ついつかり紅葉の気迫に負けて承諾してしまったー?

「一応お聞きしますがどのよつな拷問をする予定だったのですか?」

「恐らく全ての単語があなたヒトヒトアカウムヒトな「もつ結構です
あら、残念」

「うそ、それじゃあ宜しくね

桜野が手を俺の近くまで、差し伸べてきた。……はっ！？

「どうわあーー？」

「どうわあーー？」

俺は思わず、反射的に尻餅を付いて後ろに下がる。

その行動に二人とも驚き、桜野が驚きながらまた近付いてくる。

「ちょっと大丈夫？ 急にどうしたの」

「ちょっとー？ マジでそれ以上近付くな

「むー！ その人が心配してると何その言い方はーーー！」

「そうよ、美少女と寄り添うのが恥ずかしいからってその言い方はないんじゃない？」

「え、むじりその逆ですむ一方ーー？ そして桜野はそれ以上近付かないでくれー！」

「ちょっと本当にどうしたの」

ヤバいやばい。桜野、マジで近付くなーー！ 洒落にならないから！ やべえ、マジで息が苦しくなってきた。意識も朦朧としてきている。

「はい、ドーン」

「えつーー?」

いきなり紅葉が桜野を俺の方に突き飛ばしてきた。桜野も突然のこ
とだったので、そのまま俺の方に覆い被さつた。

しかも桜野の胸が俺の顔に……あ、俺死んだわ。

息が一気に苦しくなり、視界も見えなくなつて最後には暗くなつた。

そしてそのまま俺は意識を手放して、そのまま床に倒れてしまった。

第3話 「生徒会ー学校に歸るだけでも苦しいのよ、御免だよ」（後書き）

次回予告

春美「ついに女性となごとやなごとをしてしまったお兄様。あの悪女許すまじ

次回は『にじが生徒会ー良かつた男も居るんだ』です。では、次回もお楽しみに。春美がお送りしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8472z/>

碧陽学園の異端者《イレギュラー》

2011年12月27日20時52分発行